

第4回京都市未来共創チーム会議 グループ討議 議事録

Aチーム グループ討議

伊住 禮次郎 委員
杉田 真理子 委員
都地 耕喜 委員
三川 夏代 委員

伊住委員

興味深いとずっと思っているものは16番の「生態系全体で価値を捉え直す」である。これは、私の中で先ほどの議論にもリンクしている。未来を考える上で、今生きている私たちが声を上げていかないと未来につながらないが、「京都を構成している人たちの声をきちんと拾えているのか」という問いがあり、その中で、先ほどの議論でのウィキペディア的な話や、みんなで編集していくような在り方があれば、そこは、よりすくっていけるのではないかと、今っぽく取り上げられるのではないかという話でもあったと思う。

生態系全体と言うと自然や動植物のような話のイメージが先行してしまうが、京都を構成している人たち全体で、きちんと声を拾えている状態は、非常に活性しているまちの在り方ではないか。私の中で大事なものは、「みんなが持っている問題意識や課題感のようなものがきちんと拾えているのか」ということ。そのやり方として、先ほど話に挙げた、みんなで編集していくというやり方がある。

「では、その今の京都の中で声を上げられていない、拾えていない人たちが誰か」となった時に、構成する自然や、それこそ小さい幼稚園の子どもたちや、選挙権がない子どもたちという話も出てくるかもしれない。私も今2人の子どもがいるので、彼らが25歳、30歳ぐらいになった時にそのような京都であれば、まちにより誇りを持てるのかというようなことをぼんやりと考えながら聞いていた。

都地委員

私は少し経済寄りになってしまうかもしれないが、3番の「人と歴史が紡いできた多層的な文化」、7番の「変えること、変えないことの両方を大事にしている」、14番の「人を基軸にしたまちづくり」は同じレベルの話かと思う。京都は独自の経済のモデル、もっと言うと、日本本来の経済のモデルといったところがあるのではないかと前から思っており、一方、スタートアップはどうしても多産多死であったり、人と人とのつながりがすごく希薄に感じたりする経済モデルであると思う。

京都の経済においては、スタートアップというモデルは、あまり優れたものではないと思う。京都は人と人とのつながりも大切にしているし、今、自分の事業をやっていて、本当に人とのつながりだけでも生きていくことができると非常に感じる。スタートアップは、自分の企業価値を高めていき、投資家や株式を持っている人たちにキャピタルゲインの価値を高

めて、すぐに返ってくるようなビジネスモデルであると思うが、そこは人間的ではないと前から非常に感じている。

しかし、京都の経済は、長く生きる企業が多く、その長く生きていく上で、関係性を非常に大切にされる企業が多いと思う。特に「スタートアップ」という言葉が出てきている中でも、関係性を無視するような経済モデルを提供している企業は、京都は非常に少なく、やはり人と人とのつながりを大事にしていく上で、連携できるところは連携していくといったところがあるので、わざわざ東京モデルに倣わなくて良く、非常に独自の経済モデルができていて、むしろこれが日本の経済において正しい形なのではないかと個人的に感じている。

その中で、やはり3番、7番、14番のキーワードは、京都の中で経済活動を行う者にとって、非常に重要なものになると感じている。

司会

「人を基軸にした」、「人と歴史が紡いできた」などという、人との関係性の部分が大事にしたい部分なのではないかということ、それから、長寿企業の1つの生き方、すなわちお互いを共存できる関係に置いておくということが大事にしたいところか。

都地委員

そのとおりである。事業においても、ただ新しいものをやるというのではなく、本当に保護すべきところは保護しつつ、新しいことに挑戦するところは非常に強いまちであると思う。その結果、京セラやニデック、ロームなど、先頭を走り、ニッチな領域でいろいろな人の役に立っている企業があると思う。京都は京都独自の経済モデルを構築していくべきであり、東京や欧米のモデルに倣う必要は本当はないと思う。

杉田委員

全体を俯瞰した時に、今の状態を説明しているもので「そうだろう」と読めるものと、これからやっていくべき方向性のものを考えた時に、それが、例えばこういった生態系全体のデザインなど、より未来を基軸にまとめ、さらに意見を肉付けしていきたい。

伊住委員

共創チームで出す意味も、私はそこにあるだろうと思う。京都の持っている特性などは、審議会委員も、おそらくかなりのボリュームで話されていると思う。その伝統的なものの良さや、重層的な歴史のようなものも、もちろん私たちなりに解釈して伝えることはできたとしても、結果的に話していることが似通ってしまう可能性があるとする、何か審議会委員の視点から漏れ落ちている可能性のものを提案していく形の方が、ベースとしては良いのかという気はする。

私の中で、何か1つの軸になるのではないかと考えていることは、声を拾い上げる方法が視点として抜けているのではないかということ。それをトライしたかということに関して出来ていないのではないかと、きちんと伝えてシェアすべきだと思う。このような方法がある

などという情報を、私たちのジェネレーションは持っていることが多くあると思う。

杉田委員

どれを選ぶのかという議論は、少しもったいない気もする。

伊住委員

何か収束する方向性を導いてしまうことになる気がする。

都地委員

少子化も進んでいき、人が継続的に減っていたり、他のソーシャルネットサービスなどで、直接的な交流などが減ってきている中で、人間の営みの中で交流、関係性を構築していくことは非常に重要。東京都などでは難しかったところとして、人が多過ぎるからこそ人と交流ができなかったり、SNSで完結できてしまうからこそ直接の声が聞こえなかったり、いろいろとあると思う。

しかし、京都で生きていく上では、いろいろな人との関係性を非常に大切にされている方も多く、確かに多くの場合、「人」が軸になっていると思う。関係性を大切にするために、消費型ではない関係性を模索している。

伊住委員

「人」という部分を注目して見ていくとどうなるかという話だろう。

私は、きわめてパーソナルな意見となるが、今、2歳と半年の子どもがいるが、小学校以上になってくると、京都市の中でも、学校の中で伝統文化体験や、文化体験学習など、いろいろなものがある。

一方、幼稚園までは本当にそういった機会がなく、これまでは、家庭や地域の中でそのようなものに触れる機会があったが、そのようなものが家庭の中からほとんどなくなってきている状況の中で、社会の中にそういった場所がないと触れることができないという空白の期間が、幼稚園ぐらいまでに出来上がってしまう。小学校に上がったタイミングで、京都文化らしいものに触れても、もう何か別世界の文化として受け止めてしまう。

従って、私としては、未来というか今このタイミングで、もう少し京都市の中でそういった場所、特に幼児期の子どもたちなどに向けた、何か京都の文化に触れる機会をつくる場所ができれば良いと考えている。私自身が今、携わっているNPO法人としての活動もそのような思いからである。

先日、池坊委員にもお力添えいただき、幼稚園の子どもたちがお花に触れて、自分で花器を選んでお花を入れるようなことを実施し、その伝統文化と呼ばれるものに触れてもらうイベントを開催したが、何かそういったことを定期的にでも開催しないと、社会の中から本当にそういった場面がなくなる。

特に京都は、生まれてから大人になるまで、何かそういったものが地続きで、どの年代でも、きちんと文化に触れることができ、京都というものを常に感じられる状況は必要だと

思う。しかし今は、特に幼児期の子どもたちぐらいまでの取り組みは極めて乏しいと思っており、クリティカルに自分自身の問題意識を言うと、そういった部分が問題かと思う。

それは、結果として担い手がなくなるということにつながってくると思うので、今までの議論から少し離れた、より個人的な見解ではあるが、人を基軸にしたまちづくりを考える上でも、より自分自身の感覚としては、幼児期の取り組みを増やして欲しいと思う。

杉田委員

まさにこの骨子のお話を審議会ですべてした時も、高学歴の男性的な視点が強いというような話があり、子どもの話や幼児期の話のような視点が抜けているという部分があった。そういったパーソナルな部分から意見が出るのは、非常に良いと思う。

伊住委員

実際に大学などでお茶の講義などをしているが、昼がない家も増え、先日、手を挙げてもらった、ほぼゼロという状態であり、衝撃的だった。

お寺や神社などという場所がそういったものを補う場所として機能することは当然あると思うが、やはりそこだけではない動きは、何か行政的にもあるべきである。小学校、中学校、高校の取り組みは、京都市は非常に頑張っていると思っており、いろいろな場面で子どもの教育には力を入れていると感じるが、そこは少し抜けていると思う。

司会

幼少期から担い手を本当に育成していくということは、まず触れるところからということだろう。

伊住委員

そのとおりである。そのような環境が、いろいろなエリアにポツポツでもあれば良いと思う。もちろん、民間レベルで頑張れという話もある。

三川委員

資料5の18個のキーワードの中には、「今の状態を表すもの」と「未来に向けて」というキーワードが混ざっていると思う。折角選ぶのであれば、未来を向いているキーワードを大切にしていることとして掲げたいと思う中で、今議論されていた14番の「人を基軸にしたまちづくり」や、近いもので言うと11番の「つながりのデザイン」も京都らしいところにつながり、さらに言うと、16番の「生態系全体で価値を捉え直す」も、もう少しキーワードとしてブラッシュアップすると、他都市では語れないような、京都だからこそ表現できるコピーライティングに仕上がりそうだと感じている。

うまく16番のキーワードを差し込むと、それは未来ではどのような社会になるのだろうとワクワクして想像したくなる感じになる気がするので、人や関わり、つながりのような、11番、14番、16番を中心に言葉を紡いでいくと、何か私たちらしいものが見えそうだと

と思う。

都地委員

京都の中で非常に大切なものでもあり、京都の中で今も感じており、将来に残しておかなければいけないものは、つながりからくる愛ではないか。人の本来のつながりや、関係性からくるサポートや行為など、いろいろな面から愛を感じる場所があり、クリスチャン的な観点もあるからかもしれないが、このまちで生きていて、いろいろな人と関わって、いろいろなところから愛を感じる場所は多くある。

キリスト教において、無条件の愛というものがあるが、人間同士の関係性の中で、「得だ」「得でない」などは本当に関係なく、愛を示し合っている場所は非常にあると思う。恋愛なものなどではなく、本当に人を大切にすることが故の愛は、このまちに、今まさに感じる場所でもあり、残し続けなければいけないし、これを失ったまちにはしたくない。

京都のまちで、プロテスタントが爆発的に広まった背景も、そういった互いに示す愛といった観点が、京都の人が共感できたからではないかと非常に感じる場所であり、一京都市民としてだけでなく、一クリスチャンとしても、それは大切にしていきたいという思いはある。

司会

生態系全体で価値を捉え直すという話は、確か杉田委員がリジェネラティブの文脈で提示していた言葉かと記憶している。杉田委員として、この京都でこの言葉を、このテーマを掲げる思いを何か聞かせてもらえないか。

杉田委員

第3回審議会、第2回の合同会でも挙げた話かと思うが、京都は、日本の中でもいち早く近代都市を目指して整備をしてきた背景がある。一方、地球温暖化や、地球全体でいろいろな資源の枯渇のようなものが問題になる中で、新しい都市のモデルが必要なのではないかという話が、まさにこの現代だと思う。

その中で、都市が、人間のためだけではなく、生態系全体も巻き込みながら、むしろポジティブな影響も与えられるような場所であり得るのではないかという話は、近年まさに、私個人だけではなく、いろいろな研究分野で言われてきた話かと思う。

その上で、これは起草担当の野村特別委員も話していたが、外来語を当てはめて京都の未来を考えることは、できれば避けたいという思いもあり、元々日本や京都が既に連綿とやってきたことが、実は非常にサステナブルだった、リジェネラティブだったのではないかといったローカルの文脈に立ち返ったリジェネラティブシティーを、できるだけ片仮名語を使わないで提言できればと考えている。

司会

杉田委員からキーワードで「リジェネラティブ」を調べてみた。サステナブルやリサイクル

ルなどだけではなく、人がいることによって、さらに価値を増すという、本当はそういった意味合いも含まれているということを文献で読んで、それは面白いと思った。

自然体、人間の中で奪い合う関係ではなく、より与え合う、与える関係であれというようなことの意味を含んでいることに、私はしっくりきた。

伊住委員

好循環のような話ではないか。私も今はお茶の世界の仕事をしているが、別に最初からものすごく好きだったわけではないが、次第にお茶の世界に、何かしらの愛着を持つようになり、今は誇りを持って仕事をしている。それは、最初から愛情が強かったというよりは、ちょっとした愛情の糸のようなものがあり、それが成長するにつれて少しずつ太くなっていったという話だと思う。

つまり、そこが切れていなかったからこそ、今、このように仕事をしており、そういった、何かしらの愛情のようなものが循環していくというようなことはあると思う。

三川委員

伊住委員の愛情の話は、個人的に納得できた。余談だが、数年間東京に住んでいたとき、東京で新しい人に出会う時は、多くが利害関係や肩書きから入って、目的ありきの打ち上げや飲み会が多かった。しかし、京都に来てびっくりしたことが、京都の知り合いの人に、「今度飲みに行こうよ。1人連れていくから」と言われるだけで、その人が誰か、どのような人かということは一切情報がない。

利害関係があるから紹介したい、何か目的を持って人をつなげているというよりも、単純につながってほしいから、何か生まれると思うからという、純粋な心の方が多いという印象があり、京都の人たちは、無意識の愛を持っている人が多い気がする。

都地委員

何者でなくても良いところや無条件の愛といったところが、鴨川のところと少し関連すると思う。

伊住委員

何者でなくてもよいというのは、非常に腑に落ちる。

都地委員

程よい距離感であり、その結界を保つということだろう。

伊住委員

自分自身が誰かでないと肩身が狭いというような社会は、京都では少ししんどい気がする。

三川委員

肩書きで入ってしまうと、その肩書きの役目を果たさなければいけないという変な意識が芽生えてしまうが、京都にいと、そういったことが全く発生しないというところが非常に面白い。何もなくていい、受け入れてくれるという懐の深さがある。

伊住委員

そういった形の動きが入り口になった結果、結果的には仕事がバツと動いていくようなことは非常に多い気はする。

都地委員

何者でもなくても良い状態で受け入れられるからこそ、何か特殊な形を目指せるというか、そこは関係があるのかと思う。

伊住委員

京都は特に、それぞれに肩書きを背負って仕事をしている人が多い。しかし、確かに1歩外に出た時には、割と肩書きを下ろして動いている人の方が多いような気はする。

都地委員

大学の頃の知り合いの友達は、東京で働いて、京都に戻ってきたあと、今はコンビニエンスストアで働きながら、フリーター実録のような本を書いているらしいが、そのような中でも、誰も白い目で見ることなくやり続けられるといったところを、本人も感じているようだ。受け入れられているからこそ、そういった特殊な作家事業のようなことができると思う。

Bチームグループ討議

安野 貴博 委員
池坊 専宗 委員
大井 葉月 委員
大竹 莉瑚 委員
仲田 匡志 委員

仲田委員

紙で伝わる人もいれば、そうでない人もいるという配慮など、どこまでデザインしていきたいかという論点は出てきそうである。

安野委員

私たちが語っていて、審議会で語られていないことが大事である。

池坊委員

審議会の議事録は、鏡としては生きるかもしれないが、無理にそこから意見を出すこともないのではないかと。審議会の方が人数も多く、バラエティーに富んでおり、ケアや女性的なところは、審議会も当然指摘している。自分が本当に率直に、京都のここが1番良いというところを出して、話しながら結びつけていくという方法も1つかと思う。

大井委員

第2回の合同会議の時に話しているだけでも、「え?」、「あれ?」、「何か違うのか」というギャップを感じたのではないかと。自分たちの今のリアルを届けることができれば良い気がする。

大竹委員

野村特別委員がまとめ上げ、その下に審議会があり、その下に未来共創チームで何か頑張っていて考えて、それが次々と集約されていくというモデルが違うのではないかと話していた。そのモデルが既に杉田委員の言葉で言うマッチョ的な、男性的な、これまでの権力的なものだろうとは言っていた。

仲田委員

構造化、仕組み化され過ぎている部分を、もう少しオープンにした方が本日の議論は良いのではないかと。

大竹委員

未来共創チームは「ニッチさ」ではないかと。審議会委員は何でも知っており、話している内容の視座が高いイメージであった。しかし見えているからこそ非常にまとまりのあるもの

になっている。

大井委員

私は大竹委員と少し異なり、未来共創チームと審議会の初めての場となった合同会の時に、専門性があり過ぎるが故に、そこに偏った見方をされていると感じた。その結果、意識の高い、きちんと何かに取り組もうとしている人たちにしか届かないのではないかと思った。

大竹委員

集団で目指す何かは、意識が高い人たちがこれまでつくってきたものだと思う。民主的と呼ばれるものも、全て代表制ではないか。私たちも、どちらかというと意識が高いために市民の中から選ばれていると思う。これまでの構想は意識が高い人のものだった気がするが、そうではなくしていききたいのではないか。

安野委員

1 個のアプローチとしてはあるのではないか。

大竹委員

構想を考える場にアクセスできる人が限られている。

大井委員

それを回避するための「みんなの理想京 i d e a l K y o t o」かと思ったが、先ほどの話であったように、アンケートのようになりがちである。

池坊委員

提言としてまとまっていく時に、今の時代が、今までの左、右などという思想ではなく、世代などの分断も進んでおり、目の前のことに追われている気持ちもよく分かる。このビジョンや、このように京都の未来を示すことの、「なぜ」と答える気持ちをしっかりと説明しなければいけないと思っている。

資料5の18個のキーワードも、コミュニティ、人の関係、伝統文化が大事であることやいろいろなことがあるが、全て大事であるということは、聞いたら全員同意と思う。しかし、目の前の生活に追われた暮らしをしている中で、文化や歴史、京都のまちづくりを、私たちはこのように見ている、大事にしていきたい、なぜそれでも大事にするのかという説明をしっかりとしないと、何か宙に浮いている状態で、全く伝わらない感じがする。

仲田委員

大切にしたいことを大切にしたいくなる表現や届け方が欲しい。

大竹委員

文化は、現在、非日常的なものという感じか。

池坊委員

京都は比較的生活に根付いていると思う。茶会や花の展覧会だけが文化ではなく、私は、京都であれば、文化は立ち止まる時間があることだと思っている。自分という1つの軸を超えた、別の座標軸があるようなこと、その結果、信仰心が厚く、例えばお地蔵さんを毎日世話したり、きれいにしたりしている人も京都には多くいる。あるいはお茶を煎茶で飲んでいる人や町内会でつながっている人がいたり、和室や古民家をリフォームしたり、いろいろな解像度や姿で組み込まれている。

自分の軸とは違う軸もあって良い。それが文化や、京都に生きるということであり、立ち止まることが京都では根付いているのではないかと思う。

大竹委員

構想や制度は、ベースになる思想や世界観があって出来てきたものだという気がしており、民主主義などの現在の制度は比較的西洋的な考え方で、そのベースにあるのは、宗教だと思う。イエスキリストの一神教のような絶対的な存在の世界観があり、構想があると思う。

京都は、それらとは別の思想があるまちではないか。京都は、京都教という話が1回出ていたが、公とは異なる私的な思想があるまちで、その結果、文化が日常と融合している。東京的な発展の仕方をしない方が良く、争う必要がない、絶対的な価値があるという感じが、特に京都の人になればなるほど、「うちはね」という表現をされることに繋がっているのではないか。絶対的な価値を自分たちのまちに感じているということは、競争などとは異なる思想が根付いている場所なのかと思う。その結果、文化が生まれる。

しかし、今、その何か絶対的な思想は非常に大事であり、グローバルで情報や価値観が行き来して、資本主義により競争的になる中で、絶対的な京都があるという感覚は、スペシャリティーで、今後も大事にするべきではないか。

池坊委員

京都が自身を大事にしているということは、自治的な生活も強いことや学区や地域などもその思想の一例である。私は、京都で共創がないとは言わないが、それぞれの個人があって、それぞれにせめぎ合いながらバランスを取っているところが京都らしいと思う。1つの次元ではなく、それぞれの次元があり、それが共生して、重なり合っている。

仲田委員

まとめない、まとめ過ぎないということだろう。

大竹委員

扇子は分かりやすい境界であるが、現実世界の人同士の境界はもっと曖昧である。社会や

もっと規模が大きくなった時に、その境界はもっと曖昧である。

安野委員

その感覚は、審議会委員と共有できていそうな感触があったのか。

池坊委員

審議会は、よりリアルな業界を背負っていることもあり、町内会の実情や伝統文化の存続など、リアルな指摘が多かった。

大竹委員

私が感じたことは、課題ベースで思考があるという点である。京都にはこのような課題が現状で起きており、それをどう解決するかというような議論の運び方であったことが印象的であった。

安野委員

マイナスを見つけ出して、それを埋めようという感じか。

大竹委員

そのとおりである。一方で、私は、それは課題だとしたから課題になるような感覚を持っており、そうではなくポジティブに見ていくことはできるのかもしれない。例えば外国人が来たことによる交通の問題などが起きているという話から始まるような、問題ベース、課題ベースのスタートのイメージであり、そうではない視点も要るだろう。

解決したい課題ではなく、残しておきたい良さや何かが良いのではないか。

池坊委員

課題でクエスチョンを立てるから、解を出そうとして、幾つか定まってくる。しかし、そうではなく、課題に捉われなければ、解も多元的になる。

大竹委員

そのとおりである。課題は有限であり、課題がスタートであれば、その次は解決しかないので狭くなる。しかし良いところを探す感じであれば、出てくるものも、もっと広がりそうな感じがする。

例えば外国人観光客が増えているという話なども、それを課題としてしまうと、取れるアクションは、交通インフラを整える、外国人とはまた別のルートをつくるという解しか出てこないが、何かもっと違う見方ができるのではないか。

仲田委員

京都市民の私はこう考えるといったような一人一人に答えがある。

大竹委員

それが0.1市民的な解でもある。

仲田委員

0.1や1.5のような人も、それぞれの指摘や解があり、それを行動に移していきたいということではないか。

大竹委員

外国人観光客は問題を持ってきている人なのか、何か可能性を持ってきてくれる人なのかという見方。0.1市民と捉えれば、プラスに見られるという感じだろうか。一方、日常の切迫感も残したいという話もあった。

池坊委員

私は、行政はいろいろなガイドラインを引くことはできるが、生きるということは、そのようなことではないのではないかと思う。その場所に暮らすとしたら、そこに生きる人と一緒に生きていくことは、当然回答がないことであり、その中でうまくやっていくという話ではないか。

この未来共創チーム会議でいろいろな人の問題を聞いて、例えば、私は三川委員と一緒にいることが多かったが、京都に移住してなかなかじめないという話を聞き、当初そのようなことがあるのかと思っていたが、聞くたびに共感するような気持ちが湧いてきた。何をしたら解決できるか分からないが、そういった人もいて、何とかしたいという気持ちになるではないか。解決ではなく共感という価値観を盛り込みたい。

仲田委員

答えよりも、問いに対する共感から、私事になるのではないか。

池坊委員

その方が京都に生きているという感じがするのではないか。

大竹委員

「生きる」ことには解がないという話は、非常に納得できた。それは、それぞれが見つけるものだったはずである。従って、構想で、市民全員が共感するような網羅的な解をつくることは不可能だろう。

池坊委員

1つの京都の25年の解を求めようとしている歪みが、この文字の限界性や、あるいは代表性の限界や、いろいろな限界が表れている感じがする。審議会は、問題解決型で進んでいるということもある。

野村特別委員が、どれだけ素晴らしい文章を書いた場合であっても、絶対に異論が無数に来ると思う。

仲田委員

京都市民としてどう受け止めたいかということをお願いしたい。

大竹委員

構想であっても個を認めて欲しい。構想で個を盛り込むことはできないから、構想の中で、個があることを許容して欲しい。

池坊委員

一人一人が生きている感覚のニュアンスが、少し入ってくると良いと思う。審議会の議事録や、あるいは長期ビジョンの段組みなどを見ても、1つの理想的な人間の姿がそこにある感じがする。しかし、毎日の生きる日々の営みは、そのようなことではないだろう。朝は鐘の音で起きて、鳥がいて、朝ご飯がおいしい、仕事に行きたくないなど。しかし帰りに手を合わせて帰ったり、家に行ったら何やかんやとあったりする。そういった香りや匂いのようなものをあまり感じない点が少し良くない。

安野委員

先ほどの意識が高い人のためのものということとも非常に呼応することであり、1つのメッセージとして入れられると良いのではないか。個々の人の生活などに対する共感をもう少し呼ぶようにして欲しいというメッセージにはできそうな気がする。

大竹委員

その点をベースでお伝えするようなところは良いと思う。

池坊委員

「様々な矛盾もある中で、このような長期ビジョンになった」であれば良いと思う。

安野委員

その意味合いが入っているか否かで、受け止めが違う。

それとは別で、もう少し他の話もできると良いかと思う。思ったことは2つあり、1つ目は、私たちの中で話していた「無計画をデザインする」という点は、審議会ではあまり議論に挙がっていない気がしており、その点の価値をもう少し伝えたいということである。

もう1つは、「超長期目線」のような話は、長い時間軸があるという話は書きつつ、もう少し極端に長期目線を持った方が良いのではないかと思う。「長期目線」ではなく、「超長期目線」としている理由は、そういったことだと思う。その「超」が付くところこそが京都らしい価値なのではないかという仮説があったと認識しているが、その辺は少し書きぶりが弱

いと思う。

私の理解では、京都は1,000年ぐらいの歴史があるが、まちの中にも、何百年前のものなどが普通に存在し、文化的なところでも、1,000年前からつくっているという人たちがいるではないか。このような都市は、他にはあまりない。

裏を返せば、京都は、参照点が多くあるから、より先を考えられる。要するに、10年後を考えるということは、10年前があつて、現在があり、10年後はこのくらいだろうということが何となく分かる。普通のまちは1000年前ぐらいが限界であるが、京都は、1,000年前、現在を踏まえ、1,000年後を考えることができると言えるのではないか。

大竹委員

私は、長期目線は結果論ではないかと思う。これまでに淘汰されたものは多くあったはずで、私たちは残っているから「長期」だと言っているが、本当に全部が全部残ってきたわけではない。結果論として、現在、長いものが残っているが、今後もそのまま長く残っていくかは分らない。

「長期だから良い」という前提も今後は変わってくるかもしれない中で、重要なのかというよりも、残したいものかどうかの積み重ねで残ってきた気がする。その時に残したいと思ったから、残っているのであり、長期目線よりも、今、長期目線的に残したいものなのか、今、残したいものかではないか。

仲田委員

無理やり長続きさせていたという意味ではなく、1,200年以上続くまちとして持っているその物、事を大切にしたいということではないか。

大井委員

今、大事にしたいことも、それは長期の目線なのかもしれない。自分は今だと思っているが、それぞれの時代で、その人が大事にしてきたことが、気付いたら今もずっと続いているというような話になると思う。

絶対に続いていくと思っていなかったことだとしても、各々の時代を生きている人が、大事であると紡がれてきたものが、結果的に、私たちが生きていく時代の中にも残っていると思う。例えば、「無計画にデザインする」を考えているのは、今の一瞬だけなのかもしれないが、それを大事だと思えることが続くのであれば、長期的に大事にされるものになっているのかもしれない。

安野委員

長期目線を良いものと捉えるか否かは人によると思うが、私たちの今までの議論の感触では、「1年後のことしか考えない東京よりも、10年、125年先のことを考えながら、いろいろなことを行っている京都の方が良いよね」という方が多いのではないかと思う。それが京都らしさなのではないか。そういった意味では、長期の目線を持つことに対して価値を

感じることを改めてその中で認識することは、意味があるのではないかと思う。

大竹委員

そのとおりである。しかし、長期目線を、市民の中で、どれほどの人が実際に持っているのか。

安野委員

あまり持っていないと思う。

大竹委員

文化的なレベルで言えば、「この伝統文化を残したい」などがあると思う。しかし、市民レベルで長期目線を持っている人は、そこまで多くない。

安野委員

東京に住んでいる私の感触としては、平均値は、圧倒的に京都の方が高いと思う。普通の人が普通に生活していて、100年後のことはあまり考えないと思うが、それでもやはり長い目線を持っているのではないかと、外から見ると思う。

仲田委員

先日、児童館の園長が赴任した時に、最初に、地域の人に「このまちは～」などという平安時代からの話をされたそう。その時に、それが何を示したかというよりも、そのぐらいの歴史の上で、このまちのまちづくり、人づくりになってきたということ、地域の人が口伝で伝えてきたというところが面白いと思った。

みんなが大切にしているから大切にしようではなく、大切にしてきた人たちのバトンを、私たちはどうしていきたいかというところで、今のような議論が大事であり、長期が良いという価値観すらも疑うというのは、もしかすると大事な意見と思いつつ、長期にした方が良いと思っている人も未来共創チームにはいる。ここから「では何を」というところは、まさに問いだろう。

大竹委員

今までの私たちの議論で出てきた言葉を含めて、問いを投げけてみても良いかもしれない。

仲田委員

矛盾する意見を並べることも面白いかもしれない。